

清代の歩軍統領衙門について

渡 辺 修

はじめに

第一章 歩軍統領衙門の特徴と制度

(一) 順天府・五城との比較

(二) 歩軍統領衙門の組織

第二章 清初の歩軍統領衙門

(一) 入関より巡捕營併合まで

(二) 康熙後半より雍正まで

第三章 清代中期の歩軍統領衙門

(一) 乾隆初年より和珅統領就任まで

(二) 和珅統領在任時期

(三) 仁宗の衙門に対する改革

(四) 英和より道光末まで

第四章 清末の歩軍統領衙門

(一) 咸豊・同治期

(二) 光緒初年より義和団事変まで

(三) 義和団事変後の歩軍統領衙門
おわりに

清代の歩軍統領衙門について（渡辺）

はじめに

北京が元代より現在に至るまで国家行政の中心地であることはいうまでもない。満洲族王朝の清にとっても、北京は中国支配のための中枢機構が集中する極めて重要な都市であった。この北京の治安警備に当ることにより同時に清朝政権の権威をも守護したのが歩軍統領衙門である。その歩軍統領衙門については、清末の満洲八旗所屬の文人震鈞が一九〇三年に著した北京の地志『天咫偶聞』の巻四、北城の部分に、「歩軍統領衙門在帽兒胡同。按京城之所以司地面者不一。曰歩軍統領。所以司内城盜賊者也。曰外營汛。所以司外城者也。曰五城巡城御史。所以司閭閻詞訟者也。曰街道庁。所以平治道塗者也。曰順天府尹大宛兩県。職在郊垌。城内無其責也。（中略）然歩軍統領之權稍重。苟得其人。尚可為理。」と述べていて、清代の北京の警察事務（捕盜）が歩軍統領衙門（外營汛即ち巡捕營もこれに属す

る)を中心に実施されており、また統領の権限を如何に行使するかが北京の治安に大きく影響した点を指摘する。本稿ではこの歩軍統領衙門についてその制度と沿革のあらましを述べ、さらに衙門に関連した記録を通して清代の北京の状況を見てみたい。なお筆をすすめるに当り、利用した史料は『実録』・『会典』等のごく基本的な官撰史料であり、特に第二章以降はもっぱら『実録』中の記事に拠っている点を諒承されたい。また文中の年月日はすべて清暦(陰暦)で示した。

第一章 歩軍統領衙門の特徴と制度

(一) 順天府・五城との比較

清が北京を都としたのは順治元年(一六四四)のことである。ドルゴンや世祖に従って多くの旗人が関外より北京に移り、内城の漢人を排除してその地を占め、皇帝の住む皇城(紫禁城を含む)を守衛する。また内城には政府の官庁や王公・旗人の邸宅、寺院等が建ち並ぶ。これに対し明の嘉靖年間に築かれた外城には漢人官僚や市民の住居があり、特に正陽門外一帯には娯楽施設が多く繁華な様相を呈していた。

内・外城を合したいわゆる北京城とその周辺は当然清朝にとって厳重な秩序を必要とする。このため設けられている機構が歩軍統領衙門、順天府、五城兵馬司(以下単に五城と記す)である。とりわけ歩軍統領衙門の権限は大きく、清一代を通観した場合、この衙門が最も密接に北京の警察事務に関っている。今この歩軍統領衙門と順天府、五城の組織、任務を比較してみよう。

a 順天府

清朝は北京周辺区域の行政を扱う順天府を明制のまま継承した。府の構成員は兼管順天府尹(兼尹)、府尹、府丞以下みな漢人であり、僅かに順天府学の教授、訓導各一人に満洲人が任用されるに過ぎない。順天府は地方官庁と中央官庁双方の性格を併せ持ち、その任務中には租税徴収の稽查等の事務とともに、三年に一回行なわれる文・武の順天郷試の管理や、朝廷の挙行する郊祀の際の備品の供給も含まれる。細かい規定は『光緒會典事例』(以下光緒本はみな『會典事例』と略称)巻一〇九二―九六に記されている。また府のもとには捕盜營という軍隊がある。これは府の管轄する州県を東・西・南・北の四路に分け、各路に捕盜同知一人(租税や裁判事務も行なう)を置き、その下に捕盜營の把総、外委、額外外委等が配される。¹⁾ わずかな

兵力ではあるが、順天府は五城や歩軍統領衙門とともに北京付近の治安に責任を負っていたのである。ただ府の管轄地域は三衙門中最も広く、他の各種の行政事務をも扱うため、緝捕(治安維持)面で大きな働きを期待するのは困難であった。

b 五城兵馬司

五城も京城周辺の警察事務等を行なう明以来の役所である。明代には内・外両城を管轄したが、清朝が漢人を外城に遷した結果、もっぱら外城及び城外を取り締まるようになる。その職務は多岐にわたり、『會典事例』巻一〇三一―四一より主なものを拾うと、①条教(『聖諭廣訓』等の宣講)、②保甲(旗・民を問わず編査)、③米廠・飯廠の管理(米価昂騰の際の賑恤)、④命案・盜案の犯人の追捕、⑤その他の事件の予防と緝捕(邪教・囤積・私鑄・誘拐・賭博等)、⑥戲館(内城には設置できない)の稽查、⑦溝渠・街道の整備等があげられる。このように雑多な事務に携わるのであるが、その組織について以下に述べる。

五城(中・東・西・南・北に分かれる)は各城が二坊に分かれ、これを副指揮(正七品)と吏目(未入流)が管轄する。その上に正指揮(正六品)が置かれ、以上三人が「司坊官」である。官品は歩軍統領の従一品(嘉慶以前は

正二品)、順天府尹の正三品に較べかなり低い。各城には巡城御史(巡視某城監察御史、もしくは給事中。滿・漢各一人)が都察院より派されて司坊官を督率するが、任期はわずか一年であった。そのため職務に不熱心な者が多く、さらに滿漢併用により御史間の意見不一致も起きた。配下の捕役(兵丁ではない)や司坊官もみな漢人であって、宗室や旗人の関連する事件に対しては威権も及ばず、また兵器等の装備も貧弱であったと思われる。順天府に比較して所管地域は狭まっているが、この程度の五城の組織では平時はともかく、緊急の際に北京の治安維持を担当させるにはあまりに頼りない状態であったと言える。

c 歩軍統領衙門の特徴

以上の二衙門に対して歩軍統領衙門の特色を簡単に述べる。まず設置の時期(詳細は後述)は康熙十三年(一六七四)頃と見られ、この点明代より存続する順天府、五城と異なる。また組織面では、歩軍統領衙門と総称される中に、衙門内で執務する文官と守衛や緝捕に当る武官の二系列が並存するのが第一の特徴である。さらに武官系列は内城を管轄し旗人より構成される歩軍營と、主に外城と城外を管轄し漢人より兵を募る巡捕營とに二分される。旗人と漢人がそれぞれ自分たちの居住区を巡回する体制を、歩軍

統領衙門が総理しているのである。

歩軍統領衙門（以下単に衙門とも称す）の任務には『会典事例』巻一一五六―一五六五によると、守衛、斷獄、門禁、保甲の編査、緝捕、巡夜、禁令、訓練、火班等の項があり、順天府や五城に較べより治安の維持に重点を置いている。歩軍・巡捕兩營とも清末にはそれぞれ約二万と一万の兵を擁し、兵力の面でも他の二衙門を圧倒する。加えて長官の「提督九門歩軍巡捕五營統領」（以下歩軍統領、あるいは統領と略称）が皇帝の親任を受けた權勢の盛んな滿洲大臣（いわゆる親近大臣）中より選ばれる点が注目される。これは衙門自体が清朝の手で置かれたことともに、北京の治安に関して統領に大きな期待が寄せられている証拠である。次節においてこの衙門の職制をやや詳しく見てみたい。

（二）歩軍統領衙門の組織

ここでは『光緒会典』巻八七、『会典事例』巻一一五六―一六五、及び同衙門の事例集である『金吾事例』の記述により、十九世紀末頃の衙門の職制を紹介してみたい。

a 堂官

提督九門歩軍巡捕五營統領一人（従一品）、左・右翼総

兵二人（正二品）が衙門の堂官であり、その職務は（『光緒会典』（以下光緒本は単に『会典』と略称）に拠れば「掌九門之管鑰、統率八旗歩軍京營馬步兵。頒其禁令。以肅清輦轂。」である。責任の重さがわかるが、乾隆中期以降統領の任は親近大臣が兼ねるのが原則となった。

左・右翼の総兵は嘉慶四年（一七九九）に置かれて衙門の公務を統領とともに総理する。以後総兵は主に部院の侍郎クラスの官僚が兼ねて、うち一人は主に皇帝の離宮の円明園に駐し、残る一人は原則として統領とともに内城にあった。統領と総兵は本来武職であるが、実際に任命された官僚の殆どが文官をも兼ねている。清初にはこのようなケースは少ないが、後には六部尚書や大学士が統領を兼任している。このことから衙門の格の上昇が想像できる。

b 司員・筆帖式

衙門内で公文を扱い、裁判の審理（その結果答・杖に当る案件は衙門で処理し、徒刑以上は刑部へ送る）を行なうのが郎中、員外郎、主事であり、司務は檔案の保存と俸餉関係の事務を行なう（以上が司員）。また翻訳と書記の係として筆帖式があり、定員は郎中一、員外郎・主事各三、司務一、筆帖式十八（みな滿人）である。清初統領が歩軍營のみを管理していた頃すでに四人の筆帖式が居り、康熙

三十年（一六九一）に巡捕營を併せるとさらに四人増加する。同六十一年（一七二二）に員外郎一人が置かれ、以後時を追って司員と筆帖式の数が増す。彼等は衙門内で執務するのみの地味な存在のように見えるが、中には統領の信任を背に勢力を振う者や、裁判の際に収賄したり苛酷な拷問を行なう者もあったのである（後述）。

c 歩軍營

北京の内城（皇城の一部を含む）と円明園付近の警備に当るのが旗人で構成された歩軍營である（組織については表I参照）。内城内は八旗の色により八分され、それが滿洲・蒙古・漢軍に三分され（計二十四旗）、各旗がさらに幾つかの汛に分かれる。汛内の要所に堆撥（堆房・堆子とも言い、歩甲が駐屯する場所）が設けられ、歩甲は夜間ここを起点にして担当地域を巡回する。堆撥の他に汛内の街巷の入口に柵欄という木戸を設け、夜はこれを閉じて通行人をチェックし、病氣・出産等の急用のある者以外は通過を許さない。定制では堆撥に歩甲十二人を、柵欄には三人を配する。

歩軍營の兵である歩甲（歩軍ともいう）を率いて守衛、緝捕に当るのが歩軍校である。治安を維持するに際しての現場責任者と考えるとよい。巡邏を行なう歩甲と領催（歩甲

清代の歩軍統領衙門について（渡辺）

表I 歩軍營の組織（『光緒会典』巻87による）

官 職 名 と 官 品	定 員	
提督九門歩軍巡捕五營統領	從 1	1人
左・右翼総兵	正 2	2人
左・右翼翼尉（もと総尉）	正 3	2人
左・右翼副翼尉	從 3	2人
八旗協尉（もと副尉）	正 4	26人
八旗副尉（もと参尉）	正 5	26人
八旗歩軍校	正 5	336人
（捕盜歩軍校……歩軍校より選ぶ）		40人
八旗委署歩軍校	正 6	72人
領催……滿・蒙は一佐領2人、漢軍は1人（計2036）		
歩甲……滿・蒙は一佐領18人、漢軍は12人（計19122）		
※『光緒会典』による佐領数……滿681、蒙204、漢軍266（巻84）		

に関する庶務を扱う）は、八旗のいわば独立した良民である另戸と、家奴として扱われる戸下の双方より充てられる規定であるが、実際には戸下の人が多数を占めていた。これは歩甲が他の旗兵（前鋒・護軍等）に較べて職分が卑し

く、手当も少ないことと関連する。⁽⁴⁾一般の自由な旗人は、当初歩甲にならなくとも一応の生活が保証されていたのである。ただ清代中頃より一般の旗人の貧困化が進行したため、政府が彼等を歩甲に採用するようになるがこれについては後述する。

d 城門官

北京の内城には正陽・崇文・宣武・東直・朝陽・西直・阜城・德勝・安定の九門(内九門と称)が、外城には東便・西便・広渠・広寧(後広安と改)・左安・右安・永定の七門(外七門と称)がある。各門に城門領・城門吏(ともに内九門は満人、外七門は漢軍)・門千総(みな漢軍)が二名ずつ配され、その下に各門とも砲手二、門甲二十、門軍四十が置かれる。彼等の任務は門の啓閉を行ない、不審の者を誰何し、賊犯を捕えることにある。正陽門を除く内城の門には門監があり罪を犯した旗人を収監する。⁽⁵⁾また各門には大砲も備えられている。

清初は明制に倣い漢人の門千総と門軍が城門を守護していた。康熙十三年に歩軍統領が「九門の事務を提督」し、さらに外七門をも兼轄すると、門千総がみな漢軍に改められた上に新たに城門領と城門吏が置かれた。⁽⁶⁾ただ門軍は依然漢人より募集していたが、雍正二年(一七二四)にはこ

れを止め八旗の養育兵を派し、乾隆四年(一七三九)には歩甲六四〇人を門軍として守護させ清末に至る。⁽⁷⁾

e 白塔信砲

皇城内の白塔山と前述の内九門に各五位の「信砲」を設け、城内に緊急事態が発生すると現場に近い信砲を鳴らす。これを聞いた八旗の官僚等は以前より定められている地点(紫禁城内外)に駆けつけて皇帝の旨を待つ。白塔山の信砲の管理は信砲総管(満人、一人)と監守信砲官(満洲・漢軍各四人)が行なう。この緊急召集の制は順治十年(一六五三)に定まり、以来長く漢軍都統の管下にあったが、乾隆八年(一七四三)に歩軍統領衙門に移管された。⁽⁸⁾嘉慶の天理教徒の禁城侵入事件の直後には信砲関係の機具の修造について規則を定めている。

f 巡捕營

歩軍營が内城警備に従事するのに対し、外城及び城外を担当するのが巡捕五營である。清末には五營のうち中營は統領の直轄として、主に円明園付近の守衛に当り、南・左二營は左翼総兵の下にあった(組織は表II参照)。一つの汛は左・右の二哨(一哨に千総一人を置く)に、哨はさらに二つの司(一司に把総一人)

表II 巡捕營の組織(『光緒会典』巻87による)

官 職 名 と 官 品	定 員	
提督九門歩軍巡捕五營統領	従1	1人
左・右翼総兵	正2	2人
中營副將	従2	1人
五營參將	正3	5人
五營遊擊	従3	5人
五營都司	正4	5人
五營守備	正5	17人
五營千總	正6	46人
五營把總	正7	92人
經制外委		138人
外委千總……正8		
外委把總……正9		
額外外委	従9	67人

(参考) 巡捕五營各汛の名称(『中樞備覽』等による)

中營(5汛)	*円明園汛, 暢春園汛, 樹村汛, 靜宜園汛, 樂善園汛
南營(6汛)	*西珠市口汛, 東珠市口汛, 東河沿汛, 西河沿汛, 花兒市汛, 菜市口汛
左營(4汛)	*左安汛, 河陽汛, 東便汛, 広渠汛
北營(4汛)	*德勝汛, 安定汛, 東直汛, 朝陽汛
右營(4汛)	*永定汛, 阜成汛, 西便汛, 広安汛

* は都司が、その他は守備が管理する。

g 書 吏

に分かれる。巡捕營兵数は馬兵四千(うち「有馬」の兵二千、「無馬」の兵二千)、歩兵六千(戦兵と守兵各三千)で計一万となる。兵はみな漢人より募るが、後には旗人も充てられ、特に漢軍の占める率が大きい。

巡捕營の任務は歩軍營と同じく守衛と緝捕にあるが、ただ前者の場合ほぼ同じ区域を五城司坊官も管轄している。營の官兵には盜賊より受賄して犯行を匿したり、米倉を看守する役になりながら米穀を売る等の不法を行なう者が多い。漢人の兵丁が多いこともこれらの賊犯との結託をたやすくしたと思われる。

歩軍統領衙門の書吏については『会典』・『会典事例』にはまとまった記述がない。ただ『金吾事例』

章程四、衙門各科房名目並承辦事件の項に書吏の職務につき記している。書吏の頭目格である経承が司務庁・司案科に各一人、理刑科に二人居る。他に各衙門よりの来文を受ける「庁檔房」、清字（満文）の文移と歩軍營関係の事務を扱う「清檔房」、衙門占用（衙門で使い走りをする）の歩甲関係の事務及び清・漢字稿件を扱う「底檔房」等の部署に、明確な数は不明であるが書吏が置かれる。

書吏の総数ははっきりしないが、『金吾事例』歳入、兩淮利銀の項に、この利銀よりの支出の一款として、年末に衙門の書吏・外郎に銀兩（計六三五兩余）を賞給するとある。この時銀を受ける書吏は九十三人、外郎は二十六人、「書吏・外郎」と並記される者が二十七人である。一人で複数の事務を兼ねることもありうるので、実数はおよそ百人前後と見てよいのではないだろうか。以上の他書吏の実態を知る史料としては、『実録』によれば同治十年（一八七二）六月、御史劉瑞祺が、衙門の書吏と番役が結んで非刑を行ない、司員も蒙蔽をうけて裁判が遅れていると上奏した。⁽¹⁰⁾光緒八年（一八八二）十月には右庶子良貴が、衙門の経承周姓（名は不明）が緝捕に勉めない武官から規礼（「竊案費」という名目）を受け、実情が知れぬよう「消弭」していると弾劾する。⁽¹¹⁾書吏の弊害は後述の番役に較べ目立たないが、実際は衙門の裁判審理等の機会にかなり暗

躍したものと思われる。

h 番役⁽¹²⁾

衙門の捕りかたである番役の詳細については『会典事例』・『金吾事例』にも記載がない。ただ『実録』には関連の記事が多い。彼等は隸役の一種で、その子弟も含めて仕官や科擧の受験は禁じられる。このため衙門では番役への奨励の意味で、彼等が功を立てた時に頂帯を与えるとともに、子弟の出仕、応試を許すよう皇帝に請い、一時武職、武科擧に限りこれが認められた（道光初年。後述）。

番役の主任務はむろん緝捕にある。ただ彼等には定められた担当地区はなく、どこへでも逮捕に赴くことができ、同時に街巷の雑踏に紛れて偵察を行なうのにも適している。故に民間の私事にも干渉して賄賂を求めることも可能であった。彼等の総数は不明である。『実録』によれば番役に頭目と呼ばれる者が一人もしくは二人存在する。あるいはその下に最低二、三十人の番役が属していたかと思われるが確証はない。さらに白役というものがあり、いわば番役の子分で俗名を「圓扁子」と言う。乾隆元年（一七三六）の高宗の諭では、彼等は額設のものでなく番役の名を借りて「嚇詐」し、それが成らないと番役に報じて無理に罪を被せるとする。そして白役を革退して一人も残さぬ

よう厳命する。⁽¹³⁾それでも根絶は不可能で、道光十九年（一八三九）五月の御史陳光亨の奏では、近頃白役が良民を擾がしていると指摘する。⁽¹⁴⁾

番役の活動地域は北京周辺に止まらない。雍正年間すでに滄州で私鑄の犯を捕えている。⁽¹⁵⁾高宗は即位直後番役の「出京滋擾」を叱るが、乾隆末年には事件調査のため彼等を近京の州県へ送っている。嘉慶の天理教徒の禁城侵入事件後は、犯人の追跡のため番役が各地へ派遣される。

第二章 清初の歩軍統領衙門

歩軍統領衙門が前章で述べた組織を備えるまでには、北京の情勢や清廷の政策により、多くの曲折があった。以下は冗長ではあるが三つの章にわたって衙門の沿革を記し、併せて清代の北京の概況にも触れてみたい。

(一) 入関より巡捕營併合まで (一六四四—一九)

この時期は清が明代の京城警備体制を継承しつつ、歩軍統領衙門を設けて北京の治安を確立させていく過程に当る。『実録』に拠ると清軍の北京入城は順治元年五月二日であり、十七日には城門を守護する官兵を置く。この兵は

満人（旗人）であつたと見てよい。七月二十七日には巡捕南・北二營を設け（兵数二千）、漢人の兵部主事一人が督察する。⁽¹⁶⁾各門にはこの他漢人の指揮、千戸、百戸が配されて、これも上述の兵部主事（提督九門主事と称）に属し、さらに五城御史や司坊官も明代と同様に城内を巡緝していた。当時は内城にも漢人が居住していたため、各門に漢・漢双方の兵が駐したのである。

後、順治三年（一六四六）二月七日には、この頃の多盜の原因を漢人が旗下に雑居しているためとし、以降は投充した漢人は主人と同様に満洲の官兵が、他の漢人は巡捕營がそれぞれ取り締まることとした。⁽¹⁷⁾五年八月十九日には一般の漢人を南城（外城）に移した。⁽¹⁸⁾この時期は治安体制にも変化が多いが、最も注目すべきは五年四月二十一日に工部理事官の哈爾薩を、十月七日には法坦（原官は不明）をともに京城総尉（または総禦。『三朝実録』ではともに噶喇昂邦とする）に任じ、十二月七日には各旗より歩兵を管領する固山大（後の副尉）を一人、一甲喇（参領）より章京（後の歩軍校）を一人、さらに一牛录（佐領）より歩兵十人（うち撥什庫（後の領催）一人を含む）を選んで守街、宿城の事務に当らせる。⁽¹⁹⁾これを歩軍營の設立と見てよいであろう。この時はまさに内・外城が各々満人と漢人の居住区として指定され、漢人の外城への遷移が行なわれて

いる際であり、満人にとっては自らの居住地を自らの組織で取り締まろうとの意図であったと言える。

順治八年に世祖の親政が開始された頃には、中国本土はほぼ清朝の手に帰していたが、各地ではなお復明の動きが止まらなかった。北京でも十年十月に「叛民」朱由極が明の光宗の子と称して不軌を謀り、宛平県民の首告により党首七人が殺された。⁽²⁰⁾これに対し同年十一月に前述の白塔信砲の制が定められた。十二月には督捕衙門が置かれ巡捕營がこれに属す。⁽²¹⁾督捕衙門は満・漢侍郎各一人と滿州・漢軍理事官各一人を堂官とし、その下に司員、筆帖式を配して、旗下に投充した後逃亡する漢人（逃人という）や一般の盜賊の緝捕や裁判を任務とした。衙門には東・西・南・北の四司があり、巡捕營は東司の監督下にあり、やがて十四年に中營を設けて三營となり乾隆中期に至る。一方、歩軍營は督捕衙門とは別個に存在し、内九門は依然提督九門兵部主事の管下にあった。

康熙元年（一六六二）十一月に歩軍營の総尉、副尉、歩軍校の官品が定まる。聖祖親政後の八年八月五日の諭では京師に竊盜・搶奪・詐騙が多いと、歩兵、五城司坊、巡捕營の巡緝不力を責め、また番役の「勾通賄縦」の弊も指摘する。⁽²²⁾番役はこの時『実録』に始めて登場するのであるが、設置された年代はなお不明である。十二年（一六八

三）の三藩の乱の勃発は、支配体制が整ったかに見えた清朝に衝撃を与えた。そしてほぼ同時に北京では楊起隆の謀反事件が起こった。楊は明の毅宗の第三子と称して仲間を集め、漢軍の官員郎廷樞と周公直の家人もこれに参加していた。郎・周がこれを首告し、都統図海が兵を率いて逮捕に赴く。造反側の陳益（周の家人）は周の邸に立て籠り火を放って抵抗したが捕えられ、後仲間とともに処刑されたが、楊起隆自身は脱出に成功した、というのが顛末である。⁽²⁴⁾反清復明を旗印とした彼等が直接呉三桂等と気脈を通じていたかは疑わしいが、乱の発生による清廷の動揺は十分予想できたであろう。

北京においてこのような事件があった以上、聖祖の従来の治安機構を見直すのは当然である。こうして康熙十三年歩軍統領が置かれ、兵部主事（漢人）下にあった九門の門軍を統率し、同時に歩軍營では総尉の上に坐して全營を管轄する。ただこの措置が同年の何月に当るかは今のところ明確でないが、初代統領は費揚古と思われる。彼の名は『実録』康熙十七年（一六七八）四月二十七日の条に初出する。そこでは「提督九門歩軍統領費揚武（古）」は賊盜や奸宄の緝捕に功があるとして兵部に議叙を命じ、その結果一級を加えて正一品とし、一品の俸を給する等の恩典を与えている。⁽²⁵⁾『八旗通志初集』の彼の伝によれば、侍衛を

経て右翼歩軍総尉となり、内務府事務を兼ねて、聖祖の信任が厚いため新設の統領に任ぜられたようである。

統領設置のためか以降北京では謀反の動きは現れていない。むしろ取り締まるべき兵役が、上司の目を盗み民に害を及ぼす風がでてきた。これについて十九年五月の諭で「提督歩兵衙門」、五城司坊、街道庁、巡捕營に注意を促している。続いて二十三年二月九日には、守夜の歩兵が貴顯の官の夜行は見逃すのに、微賤・単身の者はすぐ捕えて索財するため、民怨を受けているとして統領を申飭した。⁽²⁷⁾七日後に費揚古は任を解かれ、後任には督捕理事官麻勒吉が起用される。

麻勒吉に続く統領開音布在任中の康熙三十年（一六九一）には、巡捕營を統領の管下に移した。⁽²⁸⁾以前の内城は歩軍營が、外城と城外は巡捕營が各々治安に当る制度では責任が統一されぬとし、統領に内城以外の地外の地域での督捕衙門や五城の権限をも授けたのである。このため名称も「提督九門歩軍巡捕三營統領」となり、督捕衙門は直屬の兵を失って権限が縮小し三十八年に廃される。この年（三十年）には巡捕營の官を増員して聖祖の離宮の暢春園や南苑にも兵を配し、さらに事務の煩雜化に備えて筆帖式四人を増す。⁽²⁹⁾こうして歩軍統領衙門は京師の治安を預かる最高官庁となった。同時に統領の人選も重要になったが、開音

布は皇帝の信頼を得ており、一時尚書・都統を兼ねて四十一年（一七〇二）六月病死する。その際聖祖は厚い卹典を与えて労を犒った。

（二）康熙後半より雍正まで

（一六九一—一七三五）

前述のように統領は康熙三十年に歩軍・巡捕兩營と城門官を統轄することとなった。名目はなお兵部に属するが実際の指揮権は統領が握っており、その正二品という官品によっても事実上兵部とは対等であったと言える。ただ皇帝の統領への信頼はしばしばその個人的模倣を生んだ。開音布に代った託合齊はその代表であり、彼の「欺罔不法、貪惡殃民」を四十七年（一七〇八）七月に弾劾したのが刑科給事中王懿である。ついで戸科給事中高遐昌が上疏し、託合齊の行なった不法を阻むには旧例を復すべきだとし、具体策をあげている。高の疏とそれに対する聖祖の諭は『皇清奏議』巻二十四と『聖祖実録』巻二三三に見え、当時の統領の権を論じているので紹介してみたい。

高の「請復旧例以安民生疏」では、統領陶和氣（託合齊）が皇帝の和輯の至意に沿っていないとし、京師の安静のため旧例に復すべき点を列する。①は巡捕三營を兵部に帰すべき点。以前三營は督捕衙門下にあったがその裁欠後

は九門提督に移管された。直省の兵馬は兵部が司るのに京城の三營のみが統領に隸しているため、「驕兵悍將」の不法も兵部は敢て問おうとしないとし、三營をなお兵部の稽查に帰し、部より派員して各汛での巡緝を監督させ、その他の規制も外省の武官の如くされたいと言う。②には詞訟を地方官に帰すべき点。提督が民詞に干預してより奸民が不法を行ない、弁兵は端を借りて弱者を虐げ、居民や行旅は側目している。思うに五城司坊、大興・宛平兩県、巡城御史、順天府府尹はみな地方官であり、重案の審理には刑部が当る。わざわざ武夫をして虎狼の威を張り魚肉の計を遂げさす必要はないとし、旧例どうり民間の詞訟は地方官に処理させるよう求める。③に街道は工部に帰すべき点。五城には分界があつて街道は司坊官が管理し、工部からも毎年司員一人を派して督理するのが定例であつた。提督が街道を管理して以来、内外出入りの際、前には三対の馬兵を列して後には百十余人の兵卒を擁し、威は満・漢に行なわれ、勢は官・民を圧している。兵馬を訓練して門禁を稽査し奸宄を防ぐのが提督の義務なのに、今は兵に勝手放題をさせていて、街道の面のみならず兵制上も有害である。従つて街道は旧例の如く工部の管理に帰すよう求める。これに対する聖祖の反論を述べると、①については、巡捕三營は先に督捕衙門下にあつた時積弊が多く、このため

外城に盜犯が絶えなかつた。それ故漢人官僚の請に従い前任統領（開音布）の時帰併させた。以後盜賊は減り、官・民が安んじている。そもそも託合齊が弾劾されている現在、その処分は兵部が定めるのであつて、後から統参するのはよくない。巡捕營の官員は朕より壯健な者を選んでき、もし一、二の不法を行なう者があれば指名弾劾すべきで、百余人の營弁と三千余の兵をみな驕悍不法とするのはおかしい。また武官は全て兵部が稽査し、歩軍統領、巡捕三營もこれに属している。建言の際兵部を攻撃するのならわかるが、高が三營を兵部に帰すよう言うのは誤りであるとす。③については、街道事務は司坊官が管理していた頃は、頭要を憚る一方で小民を腰削し、鋪戸より銀・錢を取つて綱紀が乱れていたため、現在は歩軍統領に帰併して管理させている。今商民が害を受けていると言うのならば、高自身が一年間街道事務を兼管して、その苦累を除き街道を肅清せよ、それができれば「善行善言」の人だ、とする。

工部司員の督察を受けて街道の清理を行なっていたが、康熙四十三年に内・外城の街道を歩軍統領に專管させたことを言う。⁽³¹⁾後に高の意見が採用され、旧例通り工部より派員するようになる。つまり高の主張のうち②と③は許された形となったが、①の巡捕營歸屬問題については清廷も譲らず、最後まで統領に属している。以上の経過は、設置以来三十余年を経た歩軍統領の權勢の増大を十分に示している。

託合齊を繼ぐ隆科多の統領在任中の康熙五十二年（一七一三）十二月には、暢春園の守衛に當る巡捕營兵の増員（前年に決定された）分に漢軍間散を充て、以後三營の兵は漢軍・民人双方より挑補させる。⁽³²⁾旗人（ここでは漢軍）の中に、生計のため兵となる者がでてきたのである。五十九年冬に、隆科多は理藩院尚書に拔擢されなお統領を兼ねた。彼は聖祖の從兄弟でかつ皇后の弟でもあり、以降も彼のような「世族」が多く統領となる。隆科多は聖祖の臨終の際には、ただ一人の臣下として諸皇子とともに暢春園に召され、世宗即位に當つては統領として持つ兵力を十分利用してこれを保護、擁立し、一説には彼が聖祖の遺詔を世宗に有利になるよう改竄したとさえ言われる。以後新帝の下で六十一年（一七二二）十一月には總理事務大臣となり、父の一等公を繼ぎ、十二月には吏部尚書兼歩軍統領と

なる。他にも兼任事務が増したため、六十一年十一月に護軍統領の袁泰（以前總尉となる）が統領を署理する（雍正二年十一月にも護軍統領紳奇が署理）。統領が「親近大臣」より選ばれると、彼自身すでに他の事務をも担当しているために、統領の事務に他人の手を借りるようになるのである。隆科多は雍正三年（一七二五）統領の任を解かれ、副都統阿齊圖が替わる。後五年十月、隆科多は四十一個条の罪により永遠禁錮の処分にあつた。⁽³³⁾その条項中に、提督の權を誇り一呼すれば兵二万を集められると妄言したこと、太平の世であるのに刺客を恐れて壇廟の中を搜索したこと、提督衙門筆帖式詹泰から原任吏部侍郎勒什布への囑託を徇庇したこと等があげられる。

世宗は隆科多の專横を目のあたりにしたためか、統領の持つ權力に注意を怠らなかつたようで、それが衙門への対策にも現われている。康熙六十一年に員外郎一人を始めての司員として設け（この処置は聖祖によるものかもしれない）、一応世宗のそれと見た）、雍正元年には、以後清朝皇帝の離宮となる円明園を守備する官兵を歩軍・巡捕兩營より増派させる。四年には、副尉と歩軍校の間に各旗一人ずつの参尉（正四品）を置く。⁽³⁴⁾さらに同年、安定門外草廠胡同の官房六十七間を歩軍統領衙門の衙署とする。⁽³⁵⁾この衙門に対する優遇措置の一方で、隆科多治罪の直前の五年六月

に、都察院に歩軍統領衙門の扱う事務を稽查する御史(満・漢各一)を設けている。ついで七年(一七二九)九月、前述のように衙門の刑名事務を協理する部院堂官として、世宗の信任の厚い大学士鄂爾泰の弟鄂爾奇を充てる⁽³⁶⁾。これにより統領の権限は削られ、同時に事務能力が上がるわけ、隆科多の特横に鑑みた世宗の一石二鳥の施策である。以後も八年に員外郎一、主事二を添設し、十二年には千総・把総を計十三人ふやす。また同じ年に先に与えた衙署が狭すぎるため、改めて京畿道胡同の官房(九十四間)を新衙署に定め、同時に従来官房がなく民家に間借りしていた巡捕營の官弁にも衙署を給する⁽³⁷⁾。

歩軍統領衙門が次席に官庁として体制を整えていく様子がわかる。世宗は治安取り締まりにも熱心で、盗賊や私鑄の犯を阿齊圖等をして頻りに捕獲させる。官員とともに番役も活躍したようで、十二年四月には特に論を下して彼等への錢糧をふやすが、同時に「勒索妄為」があった点も認めている⁽³⁸⁾。雍正九年末、阿齊圖はジュンガルに対する軍事行動への参加を命ぜられたが、彼はこれを喜ばず、出陣の際に沿途を擾がせたため革職となり、鄂爾奇が後任となった。しかし鄂爾奇も十一年九月、不法行為を直隸總督李衛に弾劾され、在任一年余で革職となる。続いて署吏部侍郎の鄂善が統領となり乾隆期に至る。

入関より約百年を経て、歩軍統領衙門も北京の治安維持機構として定着した。配下の兵力も豊富で、統率の任にある統領、翼尉には旗人が充てられ、皇帝の忠実な手足としてその働きが期待されている。衙門がその要請に十分答えたかは不明な点が多いが、全く無効果であったとは思えない。ただ次第に任務遂行に伴う弊害が問題にされるようになったことは確かである。

第三章 清代中期の歩軍統領衙門

この章では乾隆・嘉慶両期を扱う。乾隆期の歩軍統領衙門の特長は統領の権限が拡大した点にあり、特に半ば以降その傾向が甚だしい。続く嘉慶年間には逆に統領の力を抑える動きが目立ち、制度の改変も頻りに行なわれる。

(一) 乾隆初年より和珅統領就任まで

(一七三五—一七七七)

高宗は即位直後、番役の不法を禁じている。雍正十三年(一七三五)十二月十八日の諭では、彼等が出京して人犯を捕える際に地方を騒がせるとし、以後は巡緝範圍を京城内に限り、逮捕の時も「遲留私拷」せず官員に引渡して審訊させよと命ずる。乾隆元年六月には番役が北京

内外を自分達で分管し、各部院に仲間を配して情報を探っているとして統領に厳禁させる。ただ衙門自体の働きは評価しているようで、統領鄂善も陞身を続け恩寵も大きかった。

その鄂善も六年(一七四一)三月に銀一万両を収賄したと御史仲永檀に弾劾される。これに関し高宗より直接審問を受けた彼は、その場では千両の收受を認めながら、後に自供を翻したため皇帝の怒りを買ひ、「欺罔、大不敬」として自尽させられた⁽⁴⁰⁾(後任は舒赫德)。鄂善処刑の三日後には、左都御史劉吳竜の奏に従い番役、白役を新統領より清理させ、都察院の河南道では正身番役の年貌・籍貫を書き、また白役を置いていないとの印結を取り、考核に資することとした。また差票(逮捕状)を所持せずに犯人を捕えるケースがあるため、以後は印票を作成し、逮捕の際はその犯人名を記して兵役に与えることとした⁽⁴¹⁾。

舒赫德とそれに続く阿里衮・福隆安・豊昇額の計四人の統領はみな高宗の寵臣であり、彼等の在任期間は約四十年にわたるが、その間には部分的な改変があるのみで、他には時々『実録』に兵役の擾累の厳禁や捕盗の励行を求める上諭が記されているに過ぎない。衙門の制度のワタは動かず、ただ実情が建前に沿わなくなり、綱紀が弛んでいく過程である。統領も他に各種の任を兼ねていて衙門のみに

関われず、加えて高宗の頻繁な巡幸に随うため、他の官僚による署理のケースも増していった。

舒赫德在任中(乾隆六十九年)の前半は、それでも制度の小幅な手直しがあるが、十三年に彼が兵部尚書となり軍機処に入ると、それさえ行なわれなくなる。また彼は十三年以降十九年四月に革職されるまで各地への出差が多い。従って北京を留守にする時間がふえて衙門の事務を十分に監督できない。一応署理の統領が任命されるが、これ等の代理の長官もその下の衙門の官吏も、日常事務以外の働きをする様子がない。ために小幅な制度変更さえも行なわれないのである。

舒赫德を継ぐ阿里衮(乾隆十九—三十四年在任)もまた不在期間が多いが、就任後約二年間は北京に留っており、この間に歩軍統領の衙署が地安門外の帽兒胡同に移る⁽⁴²⁾。阿里衮は二十一年五月より二十五年秋まで新疆の軍務に従事し、留守中は大学士傅恒(高宗の最初の皇后「孝賢皇后」の弟)が統領を兼ねる。ところがこの高宗の最も信頼する大臣が上にありながら、或はそれが故に、京師の治安の弛みが甚だしくなり、特に王公の轎夫(駕籠かき)による賭博の事件が目立つ。後に阿里衮が凱旋してくるが、すぐに軍機大臣と御前大臣を兼ねたので、統領事務は代理で間に合わせ、そして三十三年(一七六八)阿里衮が再び雲南へ

出征すると、吏部尚書託恩多が署理を行なう。

同年七月、北京で「割辦案」が起る。これは人の背後からその辨髪を「偷割」する徒党が現れたという事件で、まもなく犯人の一人として普輝という僧が捕えられた。⁽⁴³⁾ それでもなお被害者は後を絶たなかったため、当時熱河にあった高宗から留京大臣劉統勳・託恩多に対し頻りに叱責の論が届く。高宗がこの事件に神経質になったのは、辨髪という満洲的風俗への侮辱と感じたためであろう。結局主犯を捕えることなく九月末に捜査を打ち切る。託恩多は後に官有の物品を密売して代金を着服し、また部下の怠玩の見逃しを後出の福隆安に弾劾され革職となった。

乾隆三十四年阿里衮は軍中で病死し、福隆安が統領を兼ねる。彼は傅恒の子ですでに御前大臣、軍機大臣の肩書をもち、さらに高宗の娘婿（額駙）でもあった。皇帝との親近さでは当時第一の「世族」高官と言える。そのためか三十九年四月には、彼の家人の藍大の暴行事件に対し巡城御史が処分の軽減を図って、御史李淑芳に弾劾される。九月には山東寿張県で王倫の反乱が起き、ついで平定されたが、この間京師近辺でも邪教の取り締まりが強化された。

この頃には統領の福隆安よりも、署理に当る英廉（内務府漢軍、馮氏）の方が執務時間が長い。衙門の事務も繁雑化しており、家柄の高い貴公子福隆安よりも、事務能力を武

器に出世してきた英廉が適材であったと言える。四十一年十月には、福隆安には特に失策もないが、統領就任以来十年に近く、交代すべき頃であるとして豊昇額（阿里衮の子）を後任とする。ただ当分は事務に未習熟のため福隆安が兼管する。⁽⁴⁴⁾ 豊昇額は在任一年で病死し、戸部侍郎和珅が統領となるが、なお福隆安の兼管も続く。

以上のように舒赫德より豊昇額までの時期は衙門の制度の改変も行なわれず、中央官庁の一としての位置は確立したのであるが、同時にその組織の中の腐敗が次第に顕著になりつつあった。この腐敗も統領の取り組み方如何では、いくらかはくい止め得たであろう。彼等は親近の大臣であるから刷新・改革も可能なのであるが、それを行なった形跡は全くない。ただこれ等の親近大臣による下僚への放任の慣習が、次の和珅の専横の土台になったとも考えられるのである。

（二）和珅統領在任時期

（一七七七—一九九）

和珅は周知のように乾隆末の汚職大官である。彼が統領に就任したのは高宗の寵愛によるが、その時すでに、戸部左侍郎・軍機大臣・内務府大臣・御前侍衛・鑲黃旗滿洲副都統等の肩書を持っていた。以後御前大臣となり、都統・

領侍衛内大臣を兼ね、尚書を経て大学士に至る。他にも兼務が多く、統領事務を常時視ることは困難であったため、始めは英廉や福隆安が、四十九年以降は綿恩（定郡王、後定親王。高宗の孫）が署理する。

和珅の在任中には衙門にもやや変化がある。まず四十三年（一七七八）四月には、雍正以来置かれていた協理刑名の部院堂官を省く。⁽⁴⁵⁾ 論では理由として部院大臣が統領を兼ねる場合がふえ、彼等はすでに刑名事務にも通曉しているからと説明する。もっともではあるが、和珅の権力強化のための一策と見ることもできよう。四十五年五月には、和珅が就任してより二年以上を経て事務にも慣れ、一方で福隆安はなお他の所管事務が多いとしてその兼管を免ずる。⁽⁴⁶⁾ こうして和珅一人に権限が集中していったのである。

翌年閏五月には巡捕營の組織が拡大された。同月二日の上諭では、巡捕三營は所轄地域が広く、また円明園周辺は京城より遠く稽察しがたいとして増兵を命じ、具体的方法を歩軍統領衙門と兵部に会同して議奏させる。⁽⁴⁷⁾ 閏五月四日には円明園の池沼を浚うため、歩甲を二千二十六人（満・蒙は各佐領二人、漢軍は一人）を添設する。七月には歩軍統領衙門と兵部の覆奏に従い、巡捕三營を五營（兵数は従来の五千百を一万とし、増加分は民人より補充し、不足ならば漢軍旗人よりも充てる）に改め、同時に施設や武器も

ふやす。そして円明園に新設の中營副將を常駐させる。⁽⁴⁸⁾ 今回の措置は円明園の警備強化に因ると思われるが、統領の権力アップにつながる点も否定できない。ただ兵力を増強しても治安状態が改良された跡は無く、依然大官の轎夫や世族の家人が庶民に暴行を加える等の事件が続く。

乾隆四十八年（一七八三）英廉が、翌年に福隆安が死亡して、和珅を掣肘しうる官僚もなくなった。和珅の北京不在中に事務を代行する綿恩はすでに壮年であり、祖父高宗の信任も薄くはないが、所詮深宮育ちであり、中流旗人より多くの経験を経て出世し、才覚もあつた和珅の権を奪うことはできなかった。彼の地位は高宗の死まで安泰であり、五十一年六月には御史曹錫宝が彼の家人劉全の奢侈を弾劾したが、処分を受けたのは曹自身であった。この間衙門が関わった事件も幾つかあるがここでは省略したい。五十七年頃より嘉慶三年までは『実録』にも記事らしいものもなく、ただ和珅の勢力の盛んさを想像するのみである。その彼も嘉慶四年（一七九九）正月、高宗が死し仁宗が親政を行なうとただちに断罪される。

正月八日和珅が獄に下され、綿恩が歩軍統領となる。十二日には次のような上諭がある。

近聞京師歩軍統領衙門及巡捕五營所管歩甲兵丁。在和珅宅内供廝役者。竟有千余名之多。突出情理之外。其兩翼

歩軍協尉及司員筆帖式等官。亦有坐甲十数名。以致歩甲之數日少。盜賊肆意夜行。殊屬不成事体。國家設立兵額。原資捕盜緝匪之用。豈可任大小營員。冒食空糧。甚至將歸伍之兵。供私宅之役。無怪乎兵數日少。盜賊肆行也。……⁽⁴⁹⁾

和珅のみならず、衙門の官員がみな歩甲を私役していたことがわかる。歩甲や兵丁の私役自体は、恐らく和珅以前より行なわれていたであろうが、その数が一千余にも上ったため、仁宗が論で叱つたものと思われる。十八日に和珅は自尽させられ、以後は彼の家産没収のための捜査が、歩軍統領衙門も巻き込んで盛んに行なわれる。これについて仁宗は三月二十一日の論で、番役が和珅の贓銀の捜索を理由として南城外の商家より搾取し、肝腎の隱匿財産を見つけれないでいると責める。そしてこの案は歩軍統領衙門や内務府慎刑司では落着きできないとして関連の者を刑部に送り、以後仁宗は衙門の改革に乗り出していく。

（三）仁宗の衙門に対する改革

（一七九九—一八二〇）

仁宗が和珅治罪の後に行なった改革の主なものを以下に述べる。まず彼は旗人達の住む内城の中に戲館があるのを嫌い禁止を図った。これに対し新統領の定親王綿恩は、太

平の象徴として残しても構わないと主張したが、仁宗は綿恩が戲館から利を貪っている官員の要求を代弁したとして斥け、方針通り一律に戲館の存続を禁じた。六月二日には「統領が為すべき夜巡は親王の職責と合わない」のを理由に綿恩を免職とし、氣に入りの戸部尚書布彦達賚（豊昇額の弟）を後任とした。そして先に統領がたびたび北京を留守にしたことに鑑み、布彦達賚の隨扈を免じた。さらに重要な決定は、以前統領は衙門の事務を一人で総理していたが、これでは事権過重で稽察も不十分になるとし、左・右翼に総兵各一人を置き、統領とともに堂官として部下の監督に当らせたことである。恭阿拉・長齡の二人が総兵となり、官品を正二品と定め、統領は従一品に昇格した。そして巡捕五營のうち中營は統領に直屬し、南・左二營は左翼総兵が、北・右二營は右翼総兵が管轄する。⁽⁵⁰⁾八月二十八日には、衙門の司員が民よりの呈控を門前払いせぬよう訓じ、十月二十七日には、巡捕營の官兵のみでは前三門外の防備が不安なため、総兵のうち一人を一日おきに駐宿させる。十一月十六日には、衙門に郎中一人を置く。以上が嘉慶四年の主な改制である。

高宗への服喪のため紫禁城にあった仁宗は、嘉慶六年より円明園にも赴くこととなった。御前大臣を兼ねていた布彦達賚が毎日伺候するため、その間内城の巡緝を兩翼翼尉

が副都統を兼ねて行ない、また左翼総兵は正陽門外に、右翼総兵は円明園にそれぞれ移駐した。⁽⁵²⁾この制度では翼尉の責任も重いため、布彦達賚は二人の翼尉（扎勒罕布と岐山）を衙門の執務の際同坐させていた。やがて彼が死し、甥（豊昇額の嗣子）の明安が後を継ぐと、この方針が変更されたため、扎勒罕布は堂官が自分達を衙門の辦事に参加させないと訴えた。仁宗はこれに対し、翼尉が副都統を兼ねると統領と総兵と平行となり、争いの原因になるとしてこの処置を取り消した。⁽⁵³⁾六年三月には、雪掻きをした歩甲への賞銀を上司が侵食しているとの噂があり、調査の結果、翼尉扎勒罕布等が途中でピンハネし、さらに一部を賤役に与えていたことが判明した。このため歩軍營では扎勒罕布、岐山の他に協尉、副尉、歩軍校等多数が革職された。⁽⁵⁴⁾歩甲は上官に私役された上、その手当さえも十分でなかったのである。仁宗は三月十日の論で、私役の歩甲がなお明安に四人、国霖（右翼総兵）に十三人あるとし、以後一人も私用せぬよう厳命する。

統領の明安は父祖の縁故で就任したものの、やがて仁宗の寵を失ない、七年正月には収賄によりイリへ流罪となった。代わって宗室の刑部尚書禄康（後の統領で南京条約締結に当った耆英の父）が起用される。この頃には白蓮教の大乱も次第に終熄に近づいていたが、清朝の屋台骨は不安

定となってきた。北京周辺に大事件の発生こそないが、治安の様態は決して仁宗を満足させていなかった。衙門の一連の改革は和珅専横の後始末から端を発したが、緝捕の現場は結局兵丁、番役に一任するしかなく、彼等がどこまで皇帝の心に沿って勤めていたかが問題となる。ただこの頃より番役の活躍が目立っており、彼等の中には功によって頂戴を受け、その子弟で官途につく者も現われてきた。仁宗は良賤を峻別して、七年十月に彼等の子弟の出仕・応試を禁ずる。これに対し歩軍統領衙門は、この禁令のため番役の召募に応ずる者がいないとし、子弟の居官を許されるよう求めた。これを聞いた御史王麟書は衙門の意見を妄奏として弾劾し、仁宗も王を支持して禄康等を議処とする。⁽⁵⁵⁾しかしなお衙門としては番役の働きを無視できなかったようである。十一年五月、仁宗は功があった番役への賞賚は皇帝が自らの意旨で行なうのであり、衙門からの奏請は無用と命ずる。

禄康が大学士となり統領兼務を罷めると、文寧が後を継ぐ。彼は就任直後上奏し、主に戸下の旗人（家人）⁽⁵⁶⁾で占められている歩甲に満洲・蒙古の正身聞散からも補充させ、壇廟や九門を守衛する歩甲のポストのうち、九五七人分を彼等に与えるよう議して承認を得た。⁽⁵⁶⁾当時旗人の困窮化が進み、その対策として嘉慶十年十一月にも、満・蒙の子弟

を巡捕營の馬兵に採用しようとの議があつたが実行されなかつた。今回の歩甲への正身間散の大量採用を期に、十二年二月、御史英綸が巡捕營の守備以下の缺を旗人に割りあてよう求めた。この案はまた却下されたが、間散旗人内に生計に苦しむ者がいよいよ増したので、十七年（一八一二）十二月に歩甲二千、無馬の馬兵二千、計四千人分を旗人専用のポストと決めた。⁵⁷この措置は兵丁のポストを旗人救済のため利用するもので、おのずと兵の質的低下にもつながるものである。

この間文寧は十三年五月に降職され、続く宜興は一年足らずで死亡し、禄康が再び兼任した。しかし彼自身の轎夫が賭博を開き、かつその際地面の官員に贈賄したことが発覚してこれも降職となり、後任に吉綸が任命された。この時期は賭博の他に宗室や旗人の暴行事件が多く、官員の詰め所に乱入する者さえあつた。これらの現状に対して、即位当初は張り切っていた仁宗も打つ手がなかったようである。衙門の官員や兵役も怠け出し、綱紀が弛んできた時発生したのが、嘉慶十八年（一八一三）九月の林清を首とする秘密結社天理教徒による禁城侵入事件である。

事件の経緯を詳述する余裕はない。ここでは事件後の清廷の処置を記すに止める。熱河よりの帰途にあつた仁宗は、九月十六日に報を受けるとすぐ戸部尚書托津と右翼総

にある点はもちろんだが、対象が主に満・蒙の正身に限り、
れていることに注意したい。後に技勇兵は訓練に止まらず
城内巡邏も行なう。

各地における余党の追捕ははかばかしい成果をあげるこ
とができず、二十一年（一八一六）正月の京察では、統領
英和と兼管順天府尹事務劉鑑之の議叙が見送られる。も
っともその後の二十二年七月に、白蓮教系の「紅陽会」に緝
訊拳人の宗室慶豊等が加わっていた事件では、英和が関連
の人犯をみな捕えて仁宗の信任を回復する。歩軍統領衙門
に關してはなお二十三年四月に張錡の案がある。これは衙
門の司員が匿名掲帖の犯に擬せられた張を「熬審」したが
自供を得られず、証拠不足のまま張を刑部へ送った。これ
により責任逃れを企て、すでに重体であつた張を刑部の獄
中で死ぬように仕向けたとして、郎中一・員外郎二・主事
二、つまり司務以外の司員全員が革職永不叙用となる。⁶⁰仁
宗にはこれを機に衙門の風紀を一新しようとの意図があつ
たようだが、大勢は挽回できなかった。

それでも仁宗は歩軍統領衙門に期待する所が多かつたよ
うである。番役子弟の出仕と応試は生涯許さなかつたが、
實際は頻繁に番役に頂帯を与えており、統領の英和も番役
を十分に働かせるためには、格外の褒賞が不可欠との考え
のようである。仁宗は彼なりに衙門の改革を図り、事実改

清代の歩軍統領衙門について（渡辺）

兵英和を京師に急行させ、留京していた統領吉綸と左翼総
兵玉麟を革職とする（後英和が歩軍統領となる）。英和は
十七日、北京に着いて犯人の搜索を開始し、十八日に、番
役が北京郊外の宋家荘に潜んでいた首犯の林清を捕えたの
で、仁宗は二十日に功勞者に破格の陞任と恩賞を与えた。
やがて仁宗も北京に戻り林清は処刑されるが、今回の事件
で改めて京師付近の捕務の弛弛が明らかとなった。とりあ
えず巡緝を勵行し兵器を点検する等の措置が行なわれた
他、保甲の編査が行なわれ、⁵⁸順天府・五城が所轄地域内の
旗人と民人（四品以下の官員も含む）を分別して調査し
た。一方番役等による犯人追跡は次第に「妄拏」の弊を生
んだため、十二月には軍機処でこの事件の最要・次要の犯
人名を定め、歩軍統領・順天府・五城、さらに直省の督撫
よりも逮捕させる。やがて保甲編査も成つて、以後の事務
は五城が經理することとした。

この事件の後、歩軍營に技勇兵（營）が置かれた。これ
は嘉慶十一・十七両年に満・蒙間散より歩甲に選ばれた者
の中から、さらに每旗五十人（満四十・蒙十）、計四百人
を選び、各旗の公所で健銳營出身の歩軍校の指導により長
槍や腰刀を習わせ、別に翼尉等からも訓練を施した後に、
成績の良い者を「金頂領催」・「六品領催」・「委歩軍校」等
の地位に陞せていく制度である。⁵⁹この狙いは歩甲の精銳化

制された点も少なくない。技勇兵の設置は、むろん精壯な
旗兵によつて北京の治安を確保するのがその目的であり、
正身旗人を歩甲や馬兵とした策は、一見有効な救済制度と
受け取れるが、實際には捕務の整頓は行なわれず、太平に
慣れた旗人達は、国初の質素・儉約を旨とした祖先とはあ
まりにかけ離れた世代であつた。

（四）英和より道光末まで

（一八二〇—五〇）

林清を捕えた功績で大いに仁宗の寵愛を得た統領英和
は、仁宗を繼いだ宣宗にも引続き信任を受け、嘉慶二十五
年（一八二〇）十二月には、番役子弟の武職への出仕と武
科舉への応試が許される（英和失脚後の道光七年十一月に
再び禁止）。番役への褒賞と同時に官員にも議叙が与えら
れたため、道光元年十二月には、衙門内に「儘先升用」の
員がふえ過ぎていると英和自身が指摘する。二年正月の京
察で英和は議叙を受け、六月には協辦大学士となり、その
権勢はいよいよ盛んとなった。しかし宣宗は彼が官界で大
きな力を持つことを次第に嫌いはじめた。六年十二月に
は、戸部から閑職の理藩院へうつされ、七年（一八二七）
二月には、彼に宣宗自身の陵墓（万年吉地）の工事を監督
させるのを理由に統領を罷免し、穆彰阿に交代させた。英

和は以前にも陵墓の工事視察に當っており、その際は署理の員を派していたのであるから、この更送は彼の失寵の証拠であろう。以後六月に英和の家人張天成が通州の小作人に對し「増租擾累」した事実が発覚し、七月に英和は熱河都統へ左遷される。この事件で守備の徐永祥（在官人役と記される。番役あがりの人物）が英和の家人とともにその邸内の事務を管理していた点も明らかになった。⁽⁶²⁾

穆彰阿は就任後三個月たたぬうちに軍機大臣となり、左翼総兵耆英が統領を継ぐ。九年三月、彼は就任以来巡捕營の操練に努めたとして部下とともに議叙を受けた。また彼は竊盜の案に對処するため「什（十）家戸章程」を議した。これは一般住居の他寺院や商舖、さらに寺院内に租住する者に対しても各々一冊を設けて、章程により翼尉・協尉以下が所管内を稽查して、一月ごとに人口の異動をまとめて衙門へ送る。これを司員・筆帖式が調べて、營員の怠慢が明らかになれば処分を行なうという制度である。⁽⁶³⁾嘉慶年間の保甲制を一步すすめて、民への看視をより嚴重にしたものと思われる。十一年二月には、歩甲の曠班（仕事の怠け）を抽查する章程を定めたところ、施行直後に「誤差」の歩甲が続出した。このように宣宗は衙門の腐敗を章程の新設で阻もうとしたが、実際には兵丁（特に歩甲）の怠玩が目立ち、耆英の優柔な性格がこれを助長したようである。

ある。十五年（一八三五）九月、鴻臚寺卿黃爵滋は兵役が捕賊ならぬ「贅賊」に努め、中でも番役が甚だしい点、堆撥や柵欄を修理すべき点等を上奏した。同じ月御史周開麒は前三門外では夜巡が行なわれず、また兵丁も本人たちは勤務せず他人を雇って代わらせており、衙門の抽查のみではこれらの弊を防止できないとする。

十六年九月、肅親王の驕奢等が賭博で捕えられた。その中に太監張進忠も含まれているのを知った総管太監張爾漢は耆英に釈放を求めたので、彼は張進忠の供述のみを取って放免した。宣宗は宦官の干渉を拒まなかったと責めて、耆英の統領・工部尚書等の任を削る（後任は奕訢）。こうして規律は崩れていき、それとともに言官による衙門への糾弾も増加する。十七年十一月、御史柏齡が營伍整頓策を上奏した。その内容は①戎行経験のある將軍・提督・總兵・副將計九人を九門へ分駐させ、また提督・總兵四人に円明園を昼夜守衛させる。②旗・綠各營の戎行経験のある章京・參將・遊撃に兵を率いて各大臣に従って守禦させ、毎日操演を二度、合操を一度行なうというものである。宣宗はこれを妄議として却け、柏齡を主事に降した。⁽⁶⁴⁾

やがてイギリスとの間にアヘン戦争が起る。その最中の二十一年（一八四一）閏三月には奕訢等の議により「招募歩甲章程」を定め、歩甲を募る際身元不確実な者が混入

して貴重な餉銀を無駄にせぬよう、現役の官員や歩甲より保結を取り、もし「匪類の冒充」があれば彼等も治罪することとした。⁽⁶⁵⁾当時の清廷が歩甲についてもいっさい保証を求めようになったことは、その斜陽を象徴するものと言えよう。

同年秋にはアヘン戦争の戦火が浙江に及ぶ。宣宗は統領奕訢を揚威將軍に、左翼總兵文蔚を參贊に任命して浙江の軍務を担当させる（二人は武功をあげられず、南京条約締結後の二十二年十月、ともに革職された）。別にイギリス軍のアモイ攻撃の事情調査に右翼總兵端華を送ったため、堂官は一時みな署理で間に合わせた。やがて前線での清軍の不利が知れたると、北京でも盜賊の動きが活発となり、二十一年十月には内務府の官柴廠に賭博のため集まった匪徒が、逮捕に赴いた兵役を殴打して外委一人を死亡させている。

この不穩時に統領を署理（奕訢革職後に実授される）したのが恩桂である。彼はまず二十一年十二月、巡捕營に槍兵千人を置き、翌年六月、イギリス船が天津沖に到るとの報を受けると、「漢奸」の動きを封じるため保甲を密査し、南京条約以後も十一月に、保甲を省いて技勇兵をふやす。この後も綱紀肅正の策を多く実行している。特に注目されるのが技勇兵の増加で、滿・蒙の間散より選拔される

点は変化ないが、兵数を四百から一七六四と大幅に増し

（うち千人が鳥槍兵）、訓練も強化された。⁽⁶⁶⁾この二十四年には、信砲章京計四人を省いて歩軍營に副翼尉（翼尉と協尉の間に位置）を設け、二十六年には、皇城内に協尉・副尉各一人を増員した。宣宗の恩桂への信任も厚く、彼が二十八年（一八四八）二月に死亡した際の上諭では「吏部尚書恩桂。秉性剛毅。管理一切事務。任勞任怨。綜覈細心。殫竭血誠。不遺余力。遽聞溘逝。不禁悼惜垂淚」⁽⁶⁷⁾と賞讃する。

第四章 清末の歩軍統領衙門

本章では主として義和團事変までの治安体制の変動を述べ、事変後二十世紀初頭の警制改革については簡単に触れるに止めた。

（一）咸豐・同治期

（一八五〇—一八七四）

この時期には北京の治安体制の変化が著しい。特に北京周辺が何度か兵火に遇い、これに対応するため「巡防制」が敷かれた点に注目したい。従来の体制に加え滿洲王大臣を中心とした巡防を置いて指揮系統を整え、同時に外城で

は漢人官僚を中心に团防(团練防堵)を行ない、漢民より团勇(練勇ともいう)を募り兵役とともに警備に当らせた。この措置は今までの治安機構が緊急事態に十分対応できぬとの認識にもとづいている。ただ旧来の体制の全面的改編を論ずるには至っていないのである。

咸豐元年(一八五一)三月、時の歩軍統領賽尚阿は太平軍を迎撃するため湖南へ向う。彼は二年九月に革職されるまで京師に戻らず、その間は署理の官員が派される。しかし恩桂により立て直された衙門の綱紀はたちまち乱れ、兵丁の怠玩・不法行為や盗案が頻繁となる。二年八月には円明園付近で一晩に銀兩強奪の案が続ぎ、十一月の論に拠れば、これも円明園近辺に騎馬の賊徒が出没するとしており、当時の不穩を反映している。三年には天京に都を定め太平天国の北伐軍が北上し、これが直隸に迫った頃いよいよ巡防制が施行される。^(補註3) ます五月十八日に、御前大臣僧格林沁・歩軍統領花沙納・右翼総兵達洪阿・内閣學士穆蔭に「京城巡防事宜の督辦」を命じた。翌日、五城に各城二、三人ずつ御史を派して巡城御史とともに巡邏させ、さらに左副都御史四人が内・外城を随時に査察する。⁽⁶⁸⁾ 二十四日には、僧格林沁等が巡防章程十二条を定めた。その詳細は不明だが、要は各衙門に本来の職務(特に捕盜)を徹底して遂行させることに尽きる。またこの頃歩甲を大興・宛

平二県の民より募る(「民人歩甲」と呼ぶ)という策が採られた。⁽⁶⁹⁾ 総兵・翼尉の面接を経る必要があるが、非旗人の歩甲が出現したのは、緊急時に際し多くの精壯な兵を求めたのがその理由であろう(以降の歩甲の改変は後述)。

七月には花沙納等の議により内城に「十家総牌」を立て、居民に互保させる(詳細は不明)。同時に各街巷に「巷長」を置く案もあったが、地面官の推諉につながるとして許されなかった。九月には北伐軍が直隸に入り、巡防処より右翼総兵達洪阿が旗兵二千を率いて南下する。九月七日、漢人官僚は团練の挙行を求めるが、文宗は順天府・五城の所管地域に吏部から(候補の)道員や知府を送って差委に充てさせているだけで警備に十分とする。同日皇帝の叔父惠親王を「總理巡防事宜」とし、九日には僧格林沁が出征するため、定郡王載銓(もと統領)と内大臣璧昌を、十日には皇弟の恭親王奕訢を各々巡防処に送り、十一日には統領花沙納に巡防を專辦させ、代わりに聯順を左都御史兼統領として、これも巡防に参加させる。九月二十日には漢人として始めて孫瑞珍・羅惇衍が巡防処入りし、二十五日には光祿寺卿宋晋・太僕寺卿王茂蔭・福建興泉永道何桂珍が外城を中心に城守を謀ることとなった(「团防処」の設立)。⁽⁷⁰⁾

十月、太平軍は天津に迫り、团防処では御史を派して五

城の保甲を督辦させ、一方壮役をふやし捐款も募る。この頃の保甲稽查が嚴重だったことは、太平軍の密偵劉澄徹が十月中二度来京して隠れ家を求めたが得られなかった、と後で自供している点よりも窺われる。ただ文宗は团防処の勢力が増大することは避けている。四年正月に聯順等が五城の壮勇に対して团防処より訓練を施すことを擬したが、文宗は团防は竊案を取り締まれば十分で、逆匪の予防が目的ではないとしている。歩軍統領衙門は主に巡防の事務に携わり、従って漢人中心の巡捕營も团防処と密接な連絡はなく、团防処の兵力は依然团勇に限られていた。

四年三月に五城の保甲清查も終了し、やがて翌五年(一八五五)正月に連鎮、二月に高唐州、四月に馮官屯と北伐軍の拠点が次々と奪回され、四月十八日には「北路一律肅清」のため巡防王大臣に優叙が与えられる。五月四日に团防処が省かれたのに続いて、十日に巡防処が撤去されて、約二年にわたる任務を終えた。巡防に従事した歩軍統領衙門の司員もこの時花翎を受けている。

北伐軍消滅後、北京の捕務は再び廢弛が目立つ。一例として聯順の案があげられる。彼は七年五月に、その「徇庇廢法」を御史毛昶熙に弾劾された。また毛は已革筆帖式慶陽が聯順との姻戚關係を恃んで、衙門内で勢力を振っていた点も指摘する。調査の結果聯順の罪が明らかにになって、

清代の歩軍統領衙門について(渡辺)

その家人も逮捕され、衙門の司員達も公費使い込みにより革職される。結局聯順は、①衙門の公金を横領して懐に入れた、②營務を廢弛させた(歩甲の空缺が千五百人に及ぶ)、③慶陽の納賄や彼の家人・部下の不法行為を見逃した等の罪によって斬監候となる。他に筆帖式五人、員外郎・主事・司務・書吏各一人がみな斬監候に、郎中・主事各一人が流罪になり、慶陽も黒竜江へ流刑となる。⁽⁷¹⁾

この案の結審直後、アロー号戦争の兵火が直隸に及び、八年四月八日に英仏連合軍が太沽砲台を占領した。統領の文彩は天津で米石の驗取に当たっていたため、署任の鄭親王端華が二十一日に実授されて城内を防備し、同日侍郎王茂蔭・内閣學士宋晋と五城御史に团防を施行さす。二十二日には惠親王、怡親王載垣、鄭親王端華、軍機大臣穆蔭・杜翰が巡防王大臣に任じられ(第二次巡防)、また尚書瑞麟と僧格林沁の兵がそれぞれ京城外と通州に配された。やがて連合軍との間に天津条約が成り、六月十二日に巡防・团防とも裁撤され、今回の嚴戒体制は短期間で終った。

咸豐九年五月、天津条約の批准書交換のため北上し、太沽砲台の突破を図り失敗した英仏連合軍は、十年夏増兵して再び天津海上に到った。清廷は昨年の勝利に驕って防備が遅れ、漸く六月末に瑞麟が旗兵九千を率いて通州に駐し、七月五日に团防処を置いた。他方で桂良等を遣って天

津と通州で連合軍と交渉させたが、その強硬態度を崩すことはできなかった。八月七日、文宗は恭親王を全権大臣に任じて北京で和議に当らせ、自らは翌日に円明園より熱河へ走った。この日僧格林沁等の兵は北京の東の八里橋で連合軍に敗れて、北京総攻撃は目前に迫った。ここに至って和議の活動が開始されるが、この頃歩軍統領衙門では、端華が文宗に従ったため左翼総兵文祥が統領を署理し、後に彼が和約交渉に加わると、刑部尚書瑞常が代わる。なお上諭には見えないが、危機に瀕した京師の治安維持のため、満人を中心に城内の巡緝が行なわれており、歩軍統領衙門の堂官（署任）や内務府大臣宝鋐が巡防を担当している。和約交渉が軌道に乗ると、留京の大臣は派兵して、北京周辺で蜂起した土匪を討ち、北京条約締結後は本格的に作戰を行なう。この指揮は文祥がとり、十月に一応平静となったため回京する。十一月十六日には条約成立に尽した恭親王・桂良等に、二十二日には巡防大臣文祥・崇綸・瑞常・慶英・麟魁等に各々議叙が与えられた。巡防処は省かれたが、団防は賈楨・周祖培を中心にお存続する。このように今回（第三次）の巡防は文宗逃走後の秩序の確保のため行なわれ、和約成立と同時に役割を終えたのである。

なお既述の如く咸豐三年に民人歩甲が出現したが、その後の変化について若干述べる。民人歩甲は第一次の巡防の

う求めたことも、長期にわたる不穩情勢を反映する。一方で官兵の腐敗は後を絶たなかったので、同治元年十二月には瑞常の後任存誠により「變通歩軍營官制章程」が定められ、不肖の官員の即時降革と、他の旗營の優れた人材の抜擢が実行された。また衙門の司員の数も不足として、これも部院のワクを越えて人材を招き、「兼辦司員」として執務させた（この制は同治十三年九月廃止）。

同治三年（一八六四）六月、清軍は太平天国の首都天京を陥したが、戦乱は依然止まない。四年四月、僧格林沁が捻との戦闘で死亡すると、清廷は慌てて保甲清查を命じ、また醇郡王（文宗・恭親王の弟）に京城防範事宜を籌辦させる。醇郡王は閏五月に巡捕營兵を閲兵してその疲弱を痛感し、兵丁を神機營（北京条約後設けられた清朝の訓練機構〔西洋式〕、その筆頭管理者は醇郡王）において半年間訓練を行なった。

同治初年には団防が恒常的に実施され、その重要性も増す。清廷は漢人の大学士賈楨等数名の官僚に五城の練勇局を管理させて、積極的に団防を指導させたが、一方で団勇による犯罪も起ってくる。七年正月、捻の張宗禹が畿南に迫ると、賈楨等の議により外城に団防総局を置く。そして団防処の大臣は巡捕營を指揮する権限を与えられた。正月十五日には恭親王と神機營王大臣（醇郡王・文祥・崇綸）

際多く採用されたが、七年には民人歩甲三千二百人分の予算で「二兩正身歩甲」を二千四百缺設けた。これには八旗の満・蒙の間散を充て、従来の歩甲の錢糧（月に一兩五錢）を二兩に増額した点が特徴である。つまり当時は①二兩正身歩甲、②一般の歩甲（另戸・戸下の旗人が中心、一兩五錢）、③民人歩甲（二兩五錢）の三種類の歩甲が並存した。民人歩甲が以降も増加したのであることは、巡防処の頻繁な設置からも想像できるが、咸豐十一年（一八六一）から翌同治元年にかけて再び改変が実施される。すなわち上述の三種類の歩甲中、合計五二〇四人分の錢糧を併して技勇兵を二六〇二人ふやし、従来よりの技勇兵とともに地面の夜巡に当らせた。すでに咸豐元年に技勇兵は京城内の巡緝にも派されていたが、当時はなお訓練中心であった。ただ北京に嚴戒体制がしばしば敷かれるようになると、治安確保のため巡邏に参加しだったのである。今回新設された技勇兵には満・蒙以外に漢軍旗人も選抜される。二兩正身歩甲の大半は技勇兵となったが、歩射等の技芸に優れぬ者は一兩五錢の歩甲にまわされ、二兩正身歩甲自体は全廃された。

穆宗即位後もなお団防は継続し、嚴戒体制に変化はない。咸豐十一年御史徐啓文が、道光期にも一時論ぜられたように、実戦経験をもつ武官に北京の各營を指揮させるよ

に巡防事宜を辦理させる（第四次）。ただ四月に捻軍は東南へ奔って北京の不安はなくなり、七月に張は淮軍に追われ投水して死亡し、巡防も省かれる。こうして京師周辺は久方ぶりに平穩となったが、五城の練勇はなお存続していた。

（二）光緒初年より義和団事変まで

（一八七四—一九〇〇）

光緒年間には北京における竊盜の案件はいよいよ増し、かつ凶悪化していった。例えば官吏の邸宅に集団で侵入して財を盗み、或は子供をさらって身代金を要求する（搶劫勒贖）等の犯罪が起る。これを取り締まるべき衙門はかえって腐敗が進み、官兵の怠玩・擾民の風は止む所を知らなかった。光緒二十年（一八九四）頃までの歩軍統領衙門に關連する動きをあげてみよう。五年十一月に統領榮祿（三年正月就任）が收賄のため降調される。八年四月には技勇兵和清等が匪徒の古香臣を捕えようとして、誤ってその兄の拳人古銘猷を連行し毆打したため、統領を署理していた左翼総兵崇礼が降調された。その後、十年五月に統領となった福錕は捕務を怠ったため、いよいよ凶悪事件が増す（なおこの年員外郎・主事各一、筆帖式二を添設）。このため十二年十二月には内城にも練勇局を置くよう御史瑞霖

が奏請する。これは却下されたが兵役の「參賊分賊」は止まず、皇帝が煙館や賭局の査禁や保甲の勵行を命じて、殆ど実行されなかった。

日清戦争直前の二十年初頭にはこの退廃が極まり、五城御史も団防を督理するための大員の派遣を求めている。歩軍・巡捕両営とも欠員が多く、技勇兵も七、八割が補充されないままであった。日本との戦端が開かれると、慌てて兵役等に保甲稽查や夜巡を命じ、九月には五城の練勇を三百五十人より五百人に増員する。そして過去の責任をとって福錕は罷免され榮禄が復辟する。十月五日、政府内に日本に対する作戦のための督辦軍務処を設け、恭親王が督辦に、慶親王が幫辦に任せられ、他に翁同龢・李鴻藻・榮禄・長麟（右翼総兵）が加わり、以上六人は同時に巡防事宜（第五次）も担当した。また敬信・懷塔布・李文田・汪鳴鑾は五城御史とともに団防を施行し、久々に京師に嚴戒体制が敷かれた（後巡防処に左翼総兵英年を添派）。十月九日には、まだ各旗營の兵に選ばれていない旗人の中から、操演に堪えうる者の数を榮禄・剛毅に調べさせる（十一月二十日に、選ばれた四千の兵を端郡王・敬信・剛毅より訓練させる）。さらに十三日には千人の練勇を一挙に二千五百人とする（いつ千人にふえたかは不明）。

北京が巡防体制下にある間、前線では清軍が敗走を続

け、二十一年三月に下関条約が締結された。巡防は不要になった筈だが、裁撤を明示する上諭は今のところ見当たらない。一応恭親王等に対し借款事宜を辦するよう命じた四月十五日を、第五次巡防終了の日とする。五月には近京州県の練兵を撤し、閏五月には団防処も廃された。ただ五城の練勇のみは、彼等によって起される紛擾が問題となりながらも、依然存続して緝捕に当る。

以後、歩軍統領衙門が盗犯の逮捕を報じて獎賞を求める奏は比較的多いが、これのみで統領榮禄を有能と言うことはできない。然るに西太后の寵臣である彼は兵部尚書を経て協辦大学士に進み、二十三年十月には武備特科の設立と練兵の実行を奏請するが、歩軍・巡捕両營の改革については何らの政策も示していない。変法運動が盛んとなる二十四年（一八九八）四月、榮禄は大学士兼直隸總督となり崇礼が後を継ぐ。当時徳宗の変法に関する上諭は多いが、歩軍統領衙門の弊を指摘して改善を求めたものはないようである。八月の「政変」以後、西太后は衙門に対し変法派を一済に逮捕させた⁸⁰。いわゆる「六君子」を始め張蔭桓・徐致靖等の連行の際に番役が活躍し、また逃亡した康有為・梁啓超の追撃も行なう。より注目すべき点は、政変直後より紫禁城・西苑・頤和園近辺に、衙門より官兵を遣つて巡回させ、内城の官庁・堆撥や車站にも、外国人保護を理由

に警備の兵をふやしたことである。特に東交民巷の外国使館一帯では精兵を繰り出して昼夜巡邏し、「保護彈庄」を行なった。二十五年二月には、載瀾等の満官と趙舒翹等の漢官各四人ずつを派し、歩軍統領衙門・順天府・五城と会して保甲章程を定議さす。これらの措置も効果なく、北京の多盗の情況は続く。そして中央政局では、西太后を擁する守旧派（端郡王・剛毅等）の権勢が盛んになった時に、義和団事変を迎えるのである。

光緒二十六年（一九〇〇）四月に義和団が北京に出現した当初は、秩序維持のため衙門より彈庄・解散させて、外人との紛争防止に勉めた。しかし義和団の勢はますます熾烈となったため、五月からは歩軍統領・順天府・五城の嚴査に加え、神機營や虎神營の兵丁を繰り出して、昼夜を問わず巡緝さす。五月十八日には義和団が西安門外の教会（北堂）を襲うとの噂があったため、左翼総兵英年・署右翼総兵載瀾を遣り「拳民」に説諭させた。一方で「土匪」の類が城内にて放火・殺人を行ない、従来の官兵のみでは取り締まれないため、神機・虎神両營の兵に加え、榮禄下の武衛中軍が出動して義和団の壇を破壊し、また多数の滿人官僚を城内各処に送って巡緝を監督させる。そして以上全ての官兵を慶親王・端郡王・貝勒載瀾・大学士榮禄が督するという嚴戒体制となった⁸¹。二十一日に李端遇と王懿榮

を京師団練大臣とし、二十二日には京師現辦の「軍務」一切を慶親王・端郡王・徐桐・崇綺及び軍機大臣等が会商せよと命じる。さらに二十五日には、後に義和団を利用して排外を煽つたとして処刑された莊親王載勛が崇礼に代わり統領となる。彼は六月に邪教（キリスト教）を奉ずる「匪犯」を捕え、幼児以外は男女を問わず殺戮する。

五月末に清廷は列国に宣戦したが、八ヶ国の連合軍は各地で清軍及び義和団を破つて北京へ急行した。そして京城内外の防備も、七月二十一日の連合軍入城で壊滅し、西太后と徳宗は西へ出奔する。歩軍統領衙門の堂官もみなこれに従い、一部の司員のみが残る。北京では無秩序状態の中で、列国がそれぞれ地区を定めて占領行政を開始し、また八月十四日には亡命中の清廷が敬信に統領の署理を命ずる。以後閏八月には載勛等排外派の官僚が職を奪われ、この年の末から翌年にかけて処刑される。

（三）義和団事変後の歩軍統領衙門

（一九〇〇—一一）

既述の如く連合軍は七月二十一日北京へ入り、各国が占領行政に當つた。歩軍統領衙門下の官兵は、西安の行在に赴く者や、逃亡した者が多く、しばらくは本来の任務を遂行できなかった。ただ西安の清廷も留京大臣中より衙門の

堂官を任命しており、警備の実権はむしろ連合軍の手中にあるものの、形の上ではなお京師の治安維持を担当しているのである。また列国の兵のみでは十分な秩序が保たれないため、歩軍統領衙門の兵丁や五城の練勇の巡緝も必要であった。二十七年には連合軍とそれに雇われた中国人による「新警察」と歩軍統領衙門・五城の「旧警察」に加え、山東巡撫袁世凱下の武衛右軍三千余が京城の弾圧のために到着した。このように各種の治安機構が北京を巡回する中で辛丑条約が成り連合軍は引き上げる。この時点領地区への近代警務により好成績をあげたとされた日本の当局者は、なお北京に留まり警政の指導を続けた。これに対し歩軍統領衙門は二百年来の伝統を背景にその権限を固守し、以後暫く新・旧機構の対立が継続した。

二十八年（一九〇二）正月、御史忠廉が京師の多盗の慢性化は、新・旧機構が並立して事権が不統一であるためと指摘する。この奏は歩軍統領等旧勢力の意を受けたものであったが、これに対し新制側も反撃し、候補侍郎胡燏棻が新制警察の利点を述べて工巡局の設置を求め、後清政府内の協議により胡の意見が採用された。工巡局は京師の街道督修と警務整頓を行なう組織である。こうして歩軍統領衙門は依然存在するが、大勢は新警察の普及へ傾いていく。四月には肅親王善耆が統領となり、同時に工巡局の事務を

も管理する。彼は「急進派」であり、歩軍營の廃止さえ予定していたとされ、さらに二十九年末に歩軍統領兼管工巡局事務となった那桐も新警察に理解を示したので、日本人教習を採用している警務学堂の卒業生が次第に現場に配されていった。

日露戦争が日本の勝利に終わった後の光緒三十一年（一九〇五）七月五日には、上諭により巡城御史の差派と五城の組織を廃し、かつての練勇はみな巡捕（警官）に改め、警察事務の運営は工巡局に準じて行なわせ、詳細を那桐等に籌画させた。⁸³これにより新警察が外城にも波及したわけである。ついで八月二十六日、革命党の呉樾が北京の車站で、欧米の憲政を考察するため出発しようとしていた載沢・徐世昌等五大臣を襲撃する事件があった。清廷はこのテロに驚き、呉の党与の敵撃を命ずるとともに、九月十日には最新の巡警制度を京師のみならず各省でも一律に実施する旨決定し、そのための統轄機構として巡警部を設けた。部の尚書には徐世昌、侍郎には毓朗と趙秉鈞（署理、袁世凱下の保定警務学堂の総辦であった）が任命され、工巡局もその管下に入った。⁸⁴十二月に部の中級以下の官も決まり（左・右の丞と参議の下に五司十六科を置く）、工巡局を改組して内・外城に巡警総庁を置いた。これ等の改革のさなかにも歩軍統領衙門は存続し、巡警総庁と同じ区域を巡

緝している。緝捕の成績が新警察に劣り、かつ依然として旧弊に染まりながらも、二万の歩甲と一万の緑營兵丁を擁する衙門を、五城のように簡単に廃止することはできなかった。

三十二年九月、巡警部は民政部と名を改め、同年冬には部内の官制にも変更があった。翌年三月、徐世昌が東三省総督となり、統領那桐の一時的な兼任を経て、五月に急進派として警戒された肅親王善耆が尚書となる。清廷が立憲制を目指している今回の情況は彼にとっても有利であったが、袁世凱の片腕の趙秉鈞とはソリが合わなかったようである。そもそもこの頃より袁や張之洞等の漢人実力者に対抗するため、「親貴」が頻りに登用されつつあり、善耆もその有力メンバーであった。こうした漢人排斥の傾向は、当時起っていた言論活動（革命団体と立憲団体のそれ）をより活発・激化させる。同時にその動きへの取り締まりが民政部や歩軍統領衙門の手で行なわれ、十一月には京城内での演説を禁止する論が下るが効果はなかったらしい。三十四年（一九〇八）七月には梁啓超（海外にあった）を中心とする政聞社が、時務研究に名を借りて煽乱を図るとして封禁され、徳宗死後の十一月九日には海外の「逆党」（孫文・康有為等）からの書函を郵政局に焚かせ、民政部・歩軍統領・順天府・各省督撫にも査辦させる。

清代の歩軍統領衙門について（渡辺）

三十四年十月、徳宗・西太后が死んで宣統帝が即位し、父の醇親王が摂政となると、「親貴」の勢力はさらに強まり、十二月には袁世凱をも下野させるに至る。以後政府中枢のポストは宗室王公・旗人が多く占めるが、彼等は概して実務能力に欠け、結果的にはかえって清朝の滅亡を早めている。歩軍統領那桐は十二月に軍機大臣となって統領を辞し、後任には前民政部左侍郎の毓朗（貝勒、善耆とも近い派にある）がなる。宣統元年（一九〇九）閏二月には趙秉鈞が「声名平常」により休致となり、左翼総兵烏珍が継ぐ。こうして民政部、歩軍統領衙門とも堂官は肅親王系の満人が占めていった（二年七月には毓朗も軍機大臣となり、統領は民政部左侍郎烏珍が兼署）。二年九月には資政院が開会し、十月には清廷が宣統五年の国会開設を宣言した。

宣統三年（一九一〇、辛亥）には歩軍統領衙門の存廃が論議される。すでに二年十二月に資政院で衙門の廃止を討議したようであり、また度支部は予算編成に当り、衙門の経費を三十万兩削ったことがこの噂に拍車をかけたといえる。『宣統政紀』の四月二日の条に見える歩軍統領衙門の奏では、衙門の過去の功績と存在の意義を述べ、今裁撤の報が伝わると人心が動揺し治安に関わりが大きいとした上で、皇帝の沙汰を待つと申明する。⁸⁵結局衙門は存続し、予

算も従来の額を維持できた。四月十日には慶親王内閣が組織され、軍機処等の中枢機構は廃される。民政部尚書の善耆はそのまま民政大臣となったが、この「親貴内閣」には周知のように各層からの反発が強く、革命を求める声もいよいよ高まってきた（善耆は慶親王との対立から閏六月理藩大臣に遷り、倉場侍郎の桂春（もと右翼総兵）が民政大臣を署理）。情勢緊迫化に伴い、八月十六日、民政部では巡警総庁に属する偵緝隊を専ら緝捕に充て、別に警備隊百二十人を組織する。その三日後の八月十九日（陽暦では一九一一年十月十日）に武昌起義が勃発する。

以後二十五日に順天府偵緝隊を編成して通州等の地に巡防させ、九月三日には禁衛軍・新軍（陸軍第一鎮）を内城や頤和園に配して、民政部・歩軍統領衙門と連絡しつつ弾圧させ、八日には先に罷免した趙秉鈞を呼び戻して民政大臣を署理さす。やがて袁世凱が悠然と再登場して、九月二十六日にその内閣が発足し、民政大臣には趙が、副大臣には烏珍が任命される。烏珍は十一月三十日、正式に歩軍統領となりなお副大臣を兼ねるが、この時すでに孫文は南京で臨時大總統に就任して中華民国が成立しており、やがて十二月二十五日に隆裕太后の名で清帝退位が宣言されたのである。

おわりに

以上清代における歩軍統領衙門の組織と沿革を追跡してきた。とりわけ沿革の部分は甚だまとまりに欠くので、ここで改めて要点を箇条書きにして示す。

一、歩軍統領衙門は康熙十三年に楊起隆の反乱を直接の契機として設けられ、以後漢人の巡捕營をも併せて組織を拡大していった。

一、その長官である統領には、乾隆期以降いわゆる親近大臣が任命されるようになり、彼等の中には統領の権力を背景に勢をふるう人物も現れてきた（和珅・英和）。

一、嘉慶・道光期には衙門の制度の見直し策が多く行なわれ、また官兵の腐敗化も進む。

一、咸豊より光緒期にかけては兵乱の勃発により巡防制が随時施行され、その際は衙門も巡防処の指揮下に入った。北京の治安の乱れは一段と激しくなった。

一、義和団の北京における激しい活動、さらに連合軍の京城占領という異常事態に対して、歩軍統領衙門はその機能を全く停止した。

一、二十世紀に入ってから「新警察」が勃興していき、衙門は守旧派の旗人の根城となつて清廷滅亡を迎える。

このように歩軍統領衙門は時と共に変化し、清末にはその治安機構としての地位も下落していく。それはちょうど清朝の根幹たる満洲旗人の衰亡とも軌を一にする。本論では清朝の首都北京を守護する歩軍統領衙門の存在や変化がもたらす各方面への影響が、決して微小なものではなかったであろう点を強調したかったのである。

註

（なお第三章の衙門の変遷に関する記述の部分は、殆んど『実録』のみに拠っているので、主要な事項以外については、一々出典の書名・巻数を示さなかった点を諒承されたい）

- (1) 捕盜營は康熙二十七年に設けられ、『順天府志（光緒）』卷六十三、東路同知は通州、南路は黃村、西路は盧溝橋、北路は沙河に駐した。同治十年に中営が順天府衙署内に置かれる。捕盜營の総兵力はこの段階で兵六百に過ぎない。
- (2) 一般には歩軍統領と呼ぶが、他に歩兵統領、九門提督、（単に）提督とも称される。
- (3) 『光緒会典事例』（以下単に『会典事例』と記す）卷一

一五六、設官参照

(4)		
旗兵の種類	月支銀兩	歳支甲米
親軍	四兩	二十二・二石
前鋒	四兩	二十二・二石
護軍（領催）	四兩	二十二・二石
馬甲	三兩	二十二・二石
歩軍領催	二兩	十・六石

清代の歩軍統領衙門について（渡辺）

歩甲	一・五兩	十・六石
養育兵	一・五兩	一・六石

- (5) 『光緒会典』卷二十一、戸部、陝西清吏司
- (6) 『会典事例』卷一一五八、断獄、雍正二年議准
- (7) 同右、卷一一五六、設官
- (8) 同右、卷一一六四、拔補兵丁
- (9) 同右、卷一一六二・六三、白塔信砲
- (9) 定員外の書吏もしくは賤役のことかと思われる。
- (10) 『同治実録』卷三十三、六月八日の条による（なお『実録』の干支表示の日付は全て數字化した）。
- (11) 『光緒実録』卷一五三、十月二日
- (12) なお内務府にも番役がある。内務府慎刑司に「管轄番役処」があつて緝捕を行なう（『会典』卷九十五）が、一般に番役といへば歩軍統領衙門のそれを指すことが多い。
- (13) 『乾隆実録』卷二十、六月十二日
- (14) 『道光実録』卷三二二、五月二十二日
- (15) 『雍正実録』卷六十五、六年正月二十二日
- (16) 『順治実録』卷六
- (17) 同右、卷四十
- (18) 同右、卷三十八・四十
- (19) 同右、卷四十一
- (20) 同右、卷七十八
- (21) 同右、卷七十九、十二月二十二日
- (22) 『康熙会典』卷一〇七以下
- (23) 『康熙実録』卷三十一

史苑(第四一卷第一号)

- (24) 同右、卷四十四
(25) 同右、卷七十三
(26) 卷一五一、名臣列伝十一
(27) 『康熙実録』卷二一四
(28) 同右、卷一五〇、二月一日及び十七日
(29) 『会典事例』卷一五六、設官
(30) 『康熙実録』卷二三三
(31) 『会典事例』卷一〇四〇、都察院、清理街道
(32) 『康熙実録』卷二五七
(33) 『雍正実録』卷六十二
(34) 『会典事例』卷一五六、設官
(35) 同右、卷一六五、優恤
(36) 『雍正実録』卷八十六
(37) 『会典事例』卷一六五、優恤
(38) 『雍正実録』卷一四二
(39) 翼尉(総尉)は「協理三營」の肩書を持つ(『雍正会典』卷二一〇)。
(40) 『乾隆実録』卷一三九・一四〇
(41) 同右、卷一四一
(42) 『会典事例』卷一六五、優恤。『金吾事例』章程一、設立衙署
(43) 『乾隆実録』卷八十四、七月四日
(44) 同右、卷一〇一八、十月一日
(45) 同右、卷一〇五四、四月九日
(46) 同右、卷一〇七、五月十九日
(47) 同右、卷一一三二

- (48) 同右、卷一一三六
(49) 『嘉慶実録』卷三十七
(50) 同右、卷四十六、六月二日・三日
(51) 前三門とは内城の九門のうち、正陽・崇文・宣武の三門を指す。
(52) 『嘉慶実録』卷七十六、五年十一月十七日
(53) 同右、卷七十九、六年二月十六日
(54) 同右、卷八十、三月一日・三日・五日
(55) 同右、卷一二三、十一月二十五日
(56) 同右、卷一七二、十一年十二月二十五日
(57) 同右、卷二六四、十二月五日・二十六日
(58) 『金吾事例』章程二及び三では、保甲と呼ぼずに「内城十家戸」とする。
(59) 『嘉慶実録』卷二八五、十九年二月二十一日
(60) 同右、卷三四一、四月八日・十二日
(61) 『道光実録』卷十、嘉慶二十五年十二月五日
(62) 同右、卷一二二、七月十六日
(63) 同右、卷一五六、九年五月十三日
(64) 同右、卷三〇三、十一月二十九日
(65) 同右、卷三五〇、閏三月十二日
(66) 『会典事例』卷一六四、拔補兵丁。『金吾事例』設官、技勇營弁兵数目
(67) 『道光実録』卷四五二、二月八日
(68) 『咸豊実録』卷九十四
(69) 『会典事例』卷一六四、拔補兵丁、咸豊三年奏准
(70) 『咸豊実録』卷一〇七

表Ⅲ 清末巡防処の構成員

第一次 (咸豊3-5年)			
氏名	官職	入処の年月	備考
僧格林沁	御前大臣	咸3・5	咸3・9出征
*花沙納	左都御史		
達洪阿	歩軍統領	咸3・5	咸3・9出征
*穆薩	右翼総兵		
内閣学士			
*惠親王			
定郡王載銓			咸4・9死
璧昌	内大臣	咸4・4死	
*恭親王奕訢		咸3・9	
*聯順	左都御史		咸4・5病免
*孫瑞珍	戸部尚書		
*羅衍翰	刑部左侍郎		
*杜翰	内閣学士	咸3・12	
*…咸豊5年4月議叙の者 同年5月10日巡防裁撤			
第二次 (咸豊8年)			

- (71) 同右、卷二三八、七年十月二十七日
(72) 同右、卷二五二
(73) 同右、卷三二七、十年八月九日
(74) 『会典事例』卷一六四、拔補兵丁、咸豊七年奏准
(75) 同右、卷一六四、拔補兵丁、咸豊十一年論と奏准、同治元年奏准
(76) 『同治実録』卷十、咸豊十一年十一月十二日
(77) 同右、卷二二二、正月十四日
(78) 『会典事例』卷一五六、設官
(79) 『光緒実録』卷三五一
(80) 同右、卷四二六、八月六日・九日
(81) 同右、卷四六四、五月十九日
(82) 同右、卷四九四、正月二十五日
(83) 同右、卷五四七
(84) 同右、卷五四九
(85) 『宣統政紀(実録)』卷五十二
補註
(1) 身元のはっきりした旗人でありながら、まだ仕官せず、錢糧(手当)を受領していない者。
(2) 昇格すべきポストに欠員が生じた場合、他の官に先だつて昇進できる意味。
(3) 巡防処の構成員については、後に掲げた表Ⅲを参照されたい。

(立教大学大学院生、文学研究科)

清代の歩軍統領衙門について(渡辺)

<p>光緒21年4月5日辦理借款事宜を命ぜられた者。この頃巡防裁撤</p>	<p>英 年</p>	<p>* 榮 禄</p>	<p>* 長 麟</p>	<p>* 翁 同 穌</p>	<p>* 慶 親王 奕 劻</p>	<p>* 恭 親王 奕 訢</p>
	<p>工部 右侍郎</p>	<p>歩軍統領</p>	<p>礼部 左侍郎</p>	<p>戸部 尚書</p>	<p>戸部 尚書</p>	
	<p>光緒20・10</p>					

突	耆	穆	英
經	英	阿	和
16	7	道	18
9	5	2	9
22	16	7	道
10	9	5	2
烏	毓	那	
珍	朗	桐	
宣	2	34	29
7	12	12	12
	宣	2	34
	7	12	

清代の歩軍統領衙門について（渡辺）